

活動型クラスにおける担当者と 学習者のズレについて

鴻野 豊子・眞鍋 雅子・森元 桂子

1. はじめに

活動型クラスを担当していると、学習者との間に溝やズレを感じ、戸惑うことが多い。このような担当者と学習者のズレとは一体何であり、どうして生まれるのだろうか。

活動型クラスが始動した当時は、「担当者が作文を添削しない」「教えない」という新しいスタイルや具体的な授業経験の欠如に、学習者のみならず教師も戸惑いを覚え、時折、両者の不理解による対立や挫折が起こった。そのため、担当者らには、授業経験を積みながら試行錯誤と内省、改善を重ねてきた経緯があり、学習者側も、活動型クラスの目的やスタイルをある程度了解した上で選択する機会が増えたため、現在では、以前ほどクラスに対する根本的な理解のズレが問題視されることは少ないように見える。しかし、依然として、活動型クラスの担当者である執筆者3名は、授業の様々な局面で学習者との間にズレを実感している。

そこで本稿では、活動型クラスを担当した際に、各担当者が感じたズレの事例を挙げ、話し合いを行い、ズレとは何であり、どう考えるべきかについてまとめてみることにした。

2. 担当クラス（2011年春学期）の概要

鴻野：「インタラクティブ日本語2」2レベル

週3コマ×15週（1コマ90分）、学習者数6名

基礎的な日本語のコミュニケーションができるようになることを目的とする。テーマを決め、様々なインタラクティブな活動（ディスカッションする、インタビューする、レポートを書く、プレゼンテーションする）を通して自分の考えを深める。そして活動の中で日本語の語彙や文法、コミュニケーション・スキル等を学習する。

眞鍋：「私にとって『魅力のある人』4」4レベル

週3コマ×15週（1コマ90分）、学習者数3名 日本人ボランティア学生1名

自分が今まで出会った人や憧れている人の中から魅力的だと思う人を選び、なぜその人に魅かれるのか、どんなところに魅かれるのかを考えクラスで発表しながらレポートにまとめていく。単なる情報収集ではなく、他の人とのやりとりを通して自分の考え方や価値観を見直す。活動の中で必要な日本語の語彙、文法、表現などを学習する。

鴻野豊子，他／活動型クラスにおける担当者と学習者のズレについて

森元：「私のこと・あなたのこと2」2レベル

週5コマ×15週（1コマ90分），学習者数7名

自分の「考えていること」や「話したいこと」を日本語で表現し，相手の「考えていること」を日本語で理解することを目的とする。自分の経験，興味があること等をテーマにして，キーワードを使った口頭発表や作文の執筆を行い，それらを通した話し合いを重ねながら，お互いへの理解を深める。他の人へのインタビューやまとめとしての文集作りの活動も行う。そのために，必要な日本語の表現を学習する。

3. 活動型クラスにおけるズレの事例

以下には，各クラスにおける学習者と担当者のズレに着目した（1）～（4）の4つの事例と，事例の中に見られるズレについて執筆者3名で話し合ったことを記述する。

（1）テーマ設定に関するズレ

【事例】「インタラクティブ日本語2」では，各学習者が設定したテーマに従って作文を書いたりディスカッションをしたりしながら，各テーマに対する自分の考えや理解を深めていくことを目指す。したがって学習者によるテーマ設定は活動を進めていく上で重要な意味を持つ。しかし，テーマ選択において担当者と学習者の意識のズレが生じることがある。

このクラスでは「私の疑問・私の答え」というテーマを設定し，学習者たちは日本において疑問に思うことを自分のテーマとして取り上げ活動を進めていくのだが，その中で例えば「どうして日本人はみな電車の中で席を絶対に譲らないのか」というステレオタイプになりがちなテーマ選択をする者や，「携帯電話会社のCMに起用されている犬について知りたい」というような学習者自身との関わりが見えにくいテーマ設定をしようとする者が出てくる場合がある。

そのような時，担当者は学習者と関わりのある，よりよい（と担当者が考える）テーマに接近させようと苦慮し，そのための様々な工夫をする。

携帯電話会社のCMをテーマにした学習者は最初，そのCMのストーリーや出演者についてインターネットで調べることで満足し，それ以上の考察はなかった。鴻野は，そのCMを見てどう感じるのか，CMにどのような効果があると思うか，またそれらについて日本人にもインタビューしてみてもどうかなど，なんとかしてテーマを学習者に引きつけようとしたがあまり効果がなかった。しかし，次第にクラスメートたちが「あなたは何が知りたいのか。こんなテーマに持っていったらどうか」とテーマや考察の仕方について説得を始める姿が見られるようになった。この学習者は最後までテーマを変えることはなかったが，最終レポートには自身の専門（経営学）と絡めたCMのプロモーション効果についての記述が見られた。

【担当者の思い】鴻野は，学習者をよりよいテーマに近づけようとする一方で，担当者がいいと思うようなテーマに学習者を誘導しようとすることは，実は担当者が望む「活動型優等生（＝担当者の思いを読み取り，その思惑通りの発言や行動をすることで，担当者に認められようとする学習者）」を作り上げようとする教師主導の行為ではないかという疑念を抱いていた。また，何の問題もなくうまくテーマが決まったり，活動がスムーズに進んでいったりした場合でも「本当にこれでよかったのか，実はあまり深まっていないのではないか」という疑問を感じていた。

3名の執筆者はみなこの疑問に共感し、活動型クラスの担当者は、「思い通りに動くクラスがいいクラスだ」という意識を問い直し、クラスや学習者が「思い通りに動く」ことに対して、もっと懐疑的でなければならぬのではないかという考えに至った。

(2) ことばの解釈・選択に関するズレ

【事例】眞鍋が担当する「私にとって『魅力のある人』4」のクラスで、ある学習者が作文に「人生の意味は死ぬまで分からないから、他の人のために頑張って世界に良いことを残すのが二番ベストだ」という文を書いてきた。学習者の「二番ベスト」は second best を和訳したということなので、「『二番目にいいこと』にしてはどうか」と議論に参加していた日本人ボランティア学生が提案した。しかし、学習者は「一番がダメだから二番目という意味ではなく、『ベストの2つ目の選択』という意味で『二番ベスト』を使っている」とあくまで自ら選択した言葉にこだわった。作文を書いた学習者だけでなく他の学習者も「日本語には second best に相当する言葉がない。ここは絶対に second best でなくてはならない」と主張し、ついに母語話者である眞鍋とボランティア学生は学習者たちの主張に説得されて、最終的に「セカンド・ベスト」と表記することで議論は決着した。

このように活動型クラスでは、表現したいことを明確に言語化しようとする学習者の意思が尊重されるため、本当に表現したいことばや、そのことばの解釈にこだわる学習者の姿がしばしば見られる。上述したようなことばの解釈・選択に関するズレは、執筆者3名がともに各クラスで経験していた。

【担当者の思い】日本語母語話者、あるいは母語話者と同等の日本語力を持つ担当者は、学習者より相対的に語彙量が多いため、自らの語彙・表現の解釈や選択が適切であるという思い込みがどこかにある。しかし、十分に時間をかけ、学習者の言葉に対するこだわりと向き合ったりやりとりを重ねると、担当者の言葉の選択や解釈が必ずしも正しいわけではないと思い知らされる。

したがって、担当者は自らの判断や思い込みが絶対ではないことを十分に認識しなければならないであろう。また、活動型クラスは学習者が選択したことばに徹底的にこだわって、納得できるまで言いたいことを表現するための模索を行える場でなくてはならないという思いを強くした。

(3) 議論と作文の間のズレ

【事例】「私にとって『魅力のある人』4」では、学習者同士の議論を通して学習者各自が選んだ「魅力のある人」に対する考えを深める。また、学習者の書いた文章をお互いに読み合いながら内容について議論を重ね、作文やレポートの完成を目指す。

そのため、眞鍋はクラスで活発に議論した内容を、学習者にぜひ作文に生かしてほしい、最大限に作文に反映させてほしいと望んでいたが、完成した学習者の作文を読むと、議論の内容が必ずしも反映していないように感じるがあった。このような学習者の議論と作文の間に生じるズレは、作文に対する学習者と担当者の意識のズレでもあると言える。

【担当者の思い】眞鍋は、議論と作文の間のズレは学習者が自分の考えを文章化した時点で満足してしまい、それ以上議論を深めようとしなくなるのが原因で生じるのではないかと考えていた。そのため、眞鍋はクラスで行う議論の際に学習者にメモを取るよう促していた。また森元は、学習者の人数分のパソコンを教室に持ち込み、各学習者が議論をしながら、同時並行で文章修正をするという方法を試みており、議論と作文の間に生じるズレを埋めることに一定の成果があったこと

鴻野豊子、他／活動型クラスにおける担当者と学習者のズレについて

を報告した。

この問題について話し合った結果、執筆者3名は、そもそも議論の内容を文章化し、目に見える形で成果物（作文）に残すことだけを学習成果と捉えることに問題があるのではないかという疑問を持つようになった。なぜならば、クラスにおける議論の中で、学習者が考えを深めるプロセスもまた学びであると捉えることができるからである。そして、議論した内容が学習者の作文に反映されていることに担当者が安心し、それによって学びが達成されたと考えてしまうことがむしろ危険であると考えようになった。

さらに、クラスにおける議論は学習者が書いた文章を全員で読み合いながら行う場合が多いが、このような「書いた文章をもとに議論する」というコミュニケーション活動自体の不自然さについても3名で話し合った。その結果、担当者は学習者がこのような議論に対して持つであろう違和感を理解することが大切であるという考えに至った。

(4) クラスの目的・成果に関するズレ

【事例】「私のこと・あなたのこと2」を担当する森元は、担当者と学習者がクラスに求めるものに、ズレがあると感じる場面に何度か遭遇する。

担当者がクラス目標として掲げる「お互いのことがわかること」とは、学習者同士が日本語の表現を通して、お互いについての情報や考え、価値観を理解し合うことを指すが、それは、学習者のコミュニケーションの力、人間関係構築の力、言語思考の主体としての育成を意図したものである。しかし、このクラスを選択する学習者の多くが、授業開始当初は「教科書クラスではあまり自由に話す機会がないので、たくさん話がしたい」という動機をもってクラスに臨んでおり、極端な場合には「話す練習の場」という意識を持っていた。また、授業期間終了後、学習者に感想を聞いても「たくさん聞いて話せてよかった」「日本語で長い作文が書けた」というような表面的な成果に対する喜びや充実に留まっている感じが気になった。

このようなことから、必ずしも言葉を通して考えを深め、主体的に周囲との関係を築き上げていく達成感を味わう境地に至る学習者ばかりではないということに、担当者として物足りなさを感じることも多かったのだが、それどころか、「話さえすればいい」というスタンスで、意図的に話すのが楽なトピックを選択し、深いやりとりを避け、無難なレポートを書いて終わろうという学習者に出くわすこともあり、担当者として困惑した。

【担当者の思い】森元は活動の様々な段階で、クラス目標を繰り返し学習者に説明し、学習者同士がクラスの意義について話し合い、考える機会も設け、趣旨の周知徹底を図りながら活動を進められる工夫をした。しかし、今回3名で話していくうち、担当者の意思を学習者にきちんと伝えることはもちろん重要だが、学習者のクラスへの参加意識は一様ではないため、学習者それぞれの達成感を柔軟に受け止めることも大切であり、そこに担当者の新たな気づきがあるかもしれないという視点を得た。また、無難な話とレポート書きに終始する学習者に対しては、それをねじ曲げるよりも、そのような学習者の現実と考え方に粘り強く向き合うことが必要であると考えた。

4. ズレの正体 ～ズレをどう考えるか～

今回の事例をまとめてみると、活動型クラスでは、担当者が考えているテーマやことばを学習者

が必ずしも選ばないことや、作文と議論の捉え方、クラスの目的等に対する学習者の意識が担当者のもとは離れる現実があることがわかる。それを執筆者らは「ズレ」として挙げているが、この「ズレ」とは客観的にずれているというよりは、あくまでも担当者側から見て学習者が思い通りにならない状況や担当者の目指すものや期待を、学習者に裏切られていると担当者が感じる状況を指していると言える。もっと言えば、担当者は往々にして「自分が正しくて、ズレているのは学習者だ」と考えがちであり、事例からは、担当者が学習者を様々な工夫によって、自身の考える軌道に乗せ直そうとしてきたことが窺える。しかし、執筆者らは今回の話し合いを通して、ズレの前で担当者が最もすべきことは、自身を見つめ直し、その価値観を問い直しながら学習者と向き合うことだという見解を打ち出した。

このことは、活動型クラスの担当者が、学習者に主体的な態度や表現を求め、学習者に様々な決定を委ねる一方で、やはり一教師として、自分の目指す方向や次元に学習者を導きたいという思いを捨てきれないジレンマを抱えた存在であることをよく物語っている。

学習者を思い通りに動かしたければ、担当者が主導的に指示を出し、学習者が従うという形をとるのが手っ取り早いのだが、それでは「活動型」ではなくなってしまふ。かといって、学習者の主体性に任せ過ぎれば、クラスがあらぬ方向へ展開し崩壊するのではないかという不安に、絶えず脅かされ続けなければならない。そのため、担当者としては、学習者が自主的にイメージ通りに動いてくれば幸いだという本音を心の内にしまいこんで、一見、学習者を主体とするような形をとりつつ、実は、担当者の期待通りに学習者が動くような仕掛けや作戦を考え、パターン化するという手口に陥りがちだ。他方、学習者側も担当者との間のズレによる居心地の悪さを払拭するため、教師が求めているものや模範解答を必死で探ろうとする場合がある。それが「活動型優等生」の、担当者を喜ばせる発言やテーマ選び、レポートを生み出してしまふ。

このように両者が直接のやりとりを避け、お互いの腹の内をひたすら探り合うところには、もはや活動型クラスを目指す自己の表現や他者理解の姿はない。そうした偽善的な学習者主体の在り方から脱却するには、担当者が学習者との間のズレを直視し、その根底にある価値観を問う必要がある。

もちろん活動型クラスの担当者が授業を行う際、己の教育観に根ざした信念を貫くことや明確な目的・目標をもって臨むことが大前提となることは言うまでもない。また、学習者がより能動的に考え、表現することを可能にするために、環境を整備することや工夫を凝らすことは、まちがいでなく担当者の重要な役割の一つである。しかし、それらを十分に踏まえた上で、担当者があえて学習者を思い通りに動かしたい気持ちから自身を解放し、学習者操作のパターン化マニュアル化の努力をやめた時にこそ、初めてズレの本質と、その先にある道筋が見えてくるのではないかと思われる。

5. ズレは活動型クラスの原点である

翻れば、学校教育という場には元来、学習者のズレを認めない体質があると言える。教師は学習者を指導し、ルールを守らせる権力を持つ存在であり、ズレている学習者は当然の如く矯正の対象として、ある大きな流れに同化させられる。

しかし、活動型クラスは、そのような場になってはいけない。それは活動型クラスが「人は一人ひとり違う考え方や価値観を持つものだから、きちんと向き合ってやりとりをしましょう」という

鴻野豊子、他／活動型クラスにおける担当者と学習者のズレについて

考えの下にあり、そのような人と人の関係の中で生み出される「ことば」のみが、真のことばとしての価値を持つと考えられるからである。

担当者と学習者、学習者と学習者も人と人であるという視点に立ち返れば、その間にズレがあるのは当然、もっと言えば、ズレがあってこそ活動型クラスが成り立つのだと言える。様々な面における見方・考え方のズレからクラスの参加者同士のやりとりが始まる。それは、発表や作文検討時の意見相違の次元に留まるものではなく、活動の成果や評価に対する判断や、クラスで今、何をどうすることが最善かという次元にも及ぶものである。そして、その答えは常に人と人（担当者と学習者、学習者と学習者、担当者と担当者）との間にある。

この観点から言えば、担当者がズレを埋めるために、一方的に学習者を動かす画策をすることが誤りであると同時に、その逆の方法として、担当者が学習者のニーズに全面的に合わせようとするような態度も根本的に誤りであることがわかる。

もし、全くズレが表面化せず、異様なほど円滑に授業が進み、ズレがない同意見の人間だけがクラスに存在するように見えるならば、それはむしろその環境や人間関係にどこか問題があると考えなければならない、注意が必要であろう。

このような活動型クラスでは、面白いことに、担当者の思い通りではない学習者の中に、自由な発想や思いがけないオリジナリティが潜んでいて、一般的な優等生タイプではない学習者が脚光を浴びることがよくある。そこでは、担当者の言うことをよく聞き、学習事項をよく覚える学習者だけが優秀なのではなく、学習者を評価する別の物差しがあるのだという気づきが起こる。これにより、担当者には、これまでよしとされてきたいわゆる「優等生観」からの脱却と、自身の評価に対する発想の転換が求められる。さらに担当者は、次第にその先にある問い—ズレを持つ人と人との関係において、人が人を評価することの困難と是非にも答えを出していかなければならないだろう。

最後に、活動型クラスがズレを内包する人と人の関係の場であるとする立場から、活動型クラスには、「担当者が学習者の意見を尊重する」という水準の「学習者主体」を超えた、「両者主体」「相互主体」の在り方が不可欠であることを述べたい。

もちろん、活動型クラスは学習者主体のクラスでなければならないが、学習者主体とは、担当者から学習者に与えられるものではなく、また担当者側の主体放棄を意味するものでもない。それは、本来の人と人の在り方をシンプルに體現した姿にすぎないのである。よって、学習者が真の意味でコミュニケーション主体になり得るためには、彼らと向き合う対象としての担当者が、それにもまして確固たるコミュニケーション主体でなければならないと言えよう。

担当者には、学習者の話を十分に聞き、受け止めるだけでなく、一人の人間として自身の考えや言いたいことも率直に言える場と関係を作り上げることや、学習者同様に自らを振り返り、その考えを問い直して柔軟に人と向き合うことが求められるのである。

担当者と学習者らが、お互いの考えの間にあるズレの存在価値を積極的に肯定し、ズレの向こうにいる相手と真剣に対峙し、思いを伝え合い、理解し合うという基本姿勢に立つ時、両者はクラスで出会う様々なズレをいたずらに恐れる必要がなくなり、むしろ、それを自己と他者の考え方の違いを楽しむための端緒とすることができるようになるだろう。すなわち、ズレは、人と人とのコミュニケーション萌芽の種であり、活動型クラスの原点というべきものなのである。